



日本共産党 前都議会議員
そねはじめレポート
 2012年 1月11日発行 第 27 号

そねはじめ事務所
 114-0032
 北区中十条2-11-6
 Tel:3907-1135
 Fax:3906-3225

北区の新成人に日本共産党と民主青年同盟が共同の呼びかけ 日本の閉塞状況うち破り未来ひらく年に



1月9日午前、北区の約2500人の新成人を祝う集いが区の主催で行われ、そねはじめ前都議と区議団、そして共産党青年支部と民主青年同盟の共同で、会場の北とびあ前で、宣伝とアンケート調査を行いました。

マイクを握ったそね前都議は、参加者とその家族に、新しく20歳を迎えたお祝いを述べるとともに、大震災と原発事故という戦後最大の国難の中で迎えた2012年こそ災害に強く原発ゼロの

宣伝する、左から永井・そね・宇都宮各氏 日本をめざし、若い世代の勉学や就職に希望のもてる年にすること、なにより日本の閉塞状況を打開するため、共産党は若い世代と力をあわせてがんばることを訴えました。

新年から宣伝にダッシュ！そねはじめ前都議と区議団

そねはじめ前都議と北区の議員団は、新年の2日と3日に、区内全域を街頭宣伝で回り、以下のような活動の報告と決意を訴えました。

●都内最大-9名の区議団の力をフルに生かして

日本共産党は、昨年の区議会選挙で9名の区議候補全員当選をかちとり、都内最大の議員団が力を合わせて、北区で若い父母の方がたと放射線自主測定にいち早く取組み、区の放射線測定、迅速な除染、内部被曝対策などを実現させてきました。



北区の住宅耐震化助成は限度額50万円で23区最低でしたが、補助額の倍増が実現する見通しとなり、今年度限りとされた住宅リフォーム助成事業の継続も要請しています。

●被災地へのねばり強い支援が、共産党の躍進につながった

そねはじめ前都議は、党の北区での被災地救援責任者として、義援金650万円、七回150名のボランティア派遣など支援を続けました。くらしと仕事の日も早い復興をめざす被災地の共産党の奮闘とあわせて、被災者の共産党への信頼が大きく高まりました。

新年の街頭宣伝に立つそねはじめ前都議 この中で、岩手・宮城・福島の県議選で共産党は議席を倍近くに躍進させ、北区が訪問・支援してきた石巻地区では、戦後初の県議会議員を誕生させることが出来ました。

●“やらずぼったくり”の増税と福祉削減の一体改悪と断固たたかう

2012年は総選挙の可能性が強まっています。民主党野田政権は、社会保障や復興財源を口実に消費税の10%への増税をうちだしながら、年金引き下げなど社会保障は切り下げる構想を、“一体改革、”の名で打ち出し、国民にさらなる苦難をおしつけようとしています。野党になった自民・公明も消費増税では一致しています。私たちはこれを何となくくい止めるため全身全霊でたたかいます。

そして震災復興とくらしを守る財源を示し、原発ゼロの新しい日本の展望を訴えて、国政での議席前進と、都議会議席回復めざしがんばりぬく決意です。

支援物資はお米、毛布を中心に

年末年始にかけ休止していた東北被災地への救援活動を1月初旬から再開することになり、みなさんのご支援を改めて呼びかけています。



昨年6月のボラ参加のそね前都議
協力いただける方はそねはじめ事務所までお問い合わせ下さい。

●2月には北区の共産党から 常駐の支援ボラを派遣

2月には共産党の北地区委員会から、10日間ほど常駐で石巻の支援センターで世話役として活動するメンバーを派遣する予定です。

個別のボランティアを希望する方は、可能な日程をご相談ください。

冬の期間、高速道路をはじめ積雪や凍結で自動車輸送がたいへんなため、支援物資は宅配便を活用し、ボランティア派遣については、現地との往復を鉄道・バスなど公共交通を利用し、申し訳ありませんが交通費は原則自己負担となります。宿泊場所は確保されており、費用は1泊500円です。

支援物資で大変喜ばれるのが、毛布とお米です。そのほか、冬物衣料(できるだけ新しいコートやジャンパーなど)、暖房器具なども助かります。

何より一番の援助は支援募金です。ご

**議員定数の削減よりも
政党助成金をけずれ!**

●東京新聞のまともな報道

全国紙ではありませんが、「東京新聞」1月5日付の社説は、衆院比例定数の八〇削減は、「少数政党切捨てにつながる」と述べるとともに、「議員一人当たりの経費は年間1億円程度で、八〇削っても80億円の削減にしかないが、むしろ年間約320億円に上る政党交付金のほうを削減したらどうか」と提起しています。

政党としてこれこそ当然の「身の削り方」ではないでしょうか。

そねはじめ交友録<その二十一> 学ぶことの厳しさを問いつづけた 小石川高校の野田先生

私の前後5年ぐらいの小石川高卒業生で日本史の野田先生を知らない人はいないでしょう

野田先生が担任だった1年上の姉の話では、入学早々からホームルーム(HR)冒頭、「信仰をもつ者はいるか」と問い、わずかしか挙手しないのを見て「他の者の生きる支えは哲学しかないわけだ」と断定し、HRはラッセルの英文を訳して論評する時間にすると宣言。決ったばかりのクラス委員が職員室を訪ね「HRはクラスの親睦の時間と教わってきた」と言うと、「おまえだな。戦争へ行けと教われれば真っ先に鉄砲担いでいくやつは」と手厳しかったそうです。

私は2年の日本史で授業を受けました。私立大の講師も勤め、その資料を駆使した大学レベルの授業で、古代の生活の変化を把握する基準の問いに窮し「刃物や食器などの性能が良くなった」というと、「それをまとめて利器と言う。歴史用語を身につけると考える力もつかんぞ」と指摘され、「人間は言葉で考える」ことを思い知りました。3年の時には休暇中の担任に代わって最後の遠足に付き添いで野田先生がバスに同乗。大学受験の重圧からいっとき解放されうかれ騒いだ我がクラスを後日、徹底的に批判されました。

何年か後、職員室で倒れ急逝されたと聞き、学校規則の改善を要求する生徒達への対応に取組む野田先生の姿勢に注目していただけに、非常に残念な思いがしました。

当時は野田先生に限らず小石川の教師達は「リベラルな校風」との評判の裏で「ヤマトタケルノミコト」の神話が無批判に校歌に入っているなど戦前の名残りや自民党政治の支え手を輩出した歴史をそれぞれの言葉で語り、「真実を学びたければ権威に頼らず、絶えず疑い、複眼で物ごとを見よ」という、戦争の中で育ち教師になった者としての良心を共通して持っていました。

6年ほど前、校舎改築の終わった小石川高校の創作展(文化祭)を見学におとずれたとき、校門の前で。

